

# 牛の肝蛭症・双口吸虫症の現況と対策

紀北家畜保健衛生所

○山中克己 上田雅彦 標本行央

## 【背景】

より良い畜産物の生産を目指すにあたって、生産性阻害疾病の一つである牛の内部寄生虫による消耗防止が重要である。管内の子牛に対する寄生虫症対策はすでに済んでいるものの、成牛の肝蛭症・双口吸虫症の発生が少ないながらもみられる。現在、牛に給与する粗飼料は輸入乾草が主流となっているため、肝蛭症・双口吸虫症は過去の病気であると考えられる農家や畜産関係者が増加していることが懸念される。

## 【目的】

慢性疾病等生産性阻害疾病の低減の一環として、酪農家・繁殖和牛農家・肥育農家における成牛の吸虫感染状況および、給与飼料や駆虫実施状況について調査を行い、管内の現況を把握して対策する。

## 【方法】

吸虫感染状況の調査においては、糞便中の虫卵検査（昭和式肝蛭卵検査法）を実施した。また、聞き取り調査として、稲ワラやあぜ草などの自家産粗飼料給与の有無と駆虫薬使用の有無などについて実施した。

## 【結果】

酪農家（7戸・56頭）において、自家産粗飼料を給与している農家は無く、糞便検査ではすべての個体が陰性であった。

繁殖和牛農家（7戸・46頭）において、自家産粗飼料を給与している農家は6戸であった。糞便検査では自家産粗飼料を給与している農家のうち4戸の農家に虫卵陽性個体が存在し、肝蛭が6頭、双口吸虫が2頭という内訳であった。このことから、自家産粗飼料を介して感染していることが疑われた。

肥育農家（8戸・27頭）において、自家産粗飼料を給与している農家は5戸で、給与していない農家は3戸であった。糞便検査の結果は繁殖和牛とは逆で、自家産粗飼料を給与している農家ではすべての個体が陰性であった。そして自家産粗飼料を給与していない3戸すべてで虫卵陽性個体がみられた。これらの陽性個体は県内外を問わず、他の農家から導入した牛ばかりであり、すでに感染した素牛を導入したことが原因と考えられた。

駆虫実施状況については調査した22戸のうち2戸で駆虫を実施しており、全体としての駆虫実施率は9%あまりと非常に低いことが分かった。

## 【考察】

繁殖和牛農家と肥育農家では予防対策が必要であることが判明した。

繁殖和牛農家における予防対策は「稲ワラの給与方法」、「駆虫薬投与のプログラム化」、「最低年一回の寄生虫検査を受ける」、「牛糞はよく発酵させてから利用する」の4つである。このうち駆虫薬投与のプログラム化については、プログラム表を作成し、農家へ配布した(図1)。駆虫薬にはトリクラベンダゾールを使用し、12ヶ月齢のときと、分娩後1ヶ月のときに投与することとした。

肥育農家については導入牛がすでに感染していることが原因であるため、導入時の駆虫薬投与のプログラム化により対策を開始した。

## 【今後の課題】

まずは、牛の肝蛭症や双口吸虫症は過去の疾病ではないことを改めて認識することが重要である。なぜなら、全国的に推進されている飼料稲の普及に伴い、ひとむかし前にように感染や被害が多発する恐れがあるからである。そして、今回作成した予防対策を本県全体で指導することにより、感染していない肥育素牛や子牛を生産・流通させていくように努める。